

「うみだようみちゃん！ うみ！ うみ！」

「落ち着いて穂乃果。とりあえず二回深呼吸をして下さい」

「すー……はー、すー、はー……うみちゃんうみだようみ！」

「うみちゃん、のところが私の名前で、それ以外が海または膿、であっていますか？」

「え？ えーと、えーと……」

「どうしたの穂乃果ちゃん。首かしげちゃって」

「あ、ことりちゃん！ うみ！ うみなんだよ！」

「ことり、ちよつと通訳してもらえますか？」

「えーと、穂乃果ちゃん、海に行きたいってことかな？」

「私もそう言ってると思うのですが、どうですか、穂乃果」

「そう、うみ！ うみだよ！」

「穂乃果、話すときはもう少し漢字を使いなさい」

「えーつと、海未ちゃん、ことりちゃん、海に行こう！」

「あ、これならわかりやすいね」

「私の名前が海未なばかりに、ことりには迷惑をかけてしまいましたね」

「とくに迷惑に感じるポイントは無かったと思うんだけど、ていうかことり、海未ちゃんって名前大好きだよ」

「私も！ 私も好き！ なんて言うか、すごく海未ちゃんっほいよね！」

「ふふ、ありがとうことり、穂乃果。私も、二人の名前は好きですよ」

「じゃあ相思相愛だね！」

「ちよつと穂乃果ちゃんのその使い方は間違ってる気もするけど、そういうことなのかな？」

「それでは告白タイムも終わったところで、穂乃果、急にどうしたんです」

「えつとね、今日はどうもお天気良いじゃない？」

「そうだね、なんだか夏って感じだよね」

「それで、授業中にぼーっと空を見てたら、海に行きたくなっただんだ！」

「……なるほど、よくわかりました」

「さすが穂乃果ちゃん。思い立ったら即行動だね」

「というわけで、海に行こうよ！」

「そうですね……それでは放課後にでも行ってみましょうか。ことりは？」

「もちろん一緒に行くよ。今日はとくに予定も無いし」

「やった！ ありがとう海未ちゃん、ことりちゃん！」

「えつと、でもどこの海に行くの？」

「それはことりにお任せします」

「それはことりちゃんにお任せするよ！」

「え？ えーと……うん。じゃあまた、放課後に」
「わかりました」

「よろしくね、ことりちゃん！」

Track-02 ほのかとことり

「おー！ レインボーブリッジ！」

「久しぶりですね、ゆりかもめに乗るのも」

「うん、学校から一番近くて行きやすいのって、やっぱりお台場かなって」

「ねえねえことりちゃん、かもめってことり？」

「え？ ことりはかもめじゃないよ？」

「そうじゃなくて、かもめはことりなのかなって」

「えーっと……海末ちゃん？」

「穂乃果、漢字を知らないさい」

「かもめって漢字でどう書くのかな？」

「かもめは鷗、と書きます」

「そうなんだ、じゃあことりちゃん、鷗って小鳥かな？」

「小鳥って言うほど小さくは無いんじゃないかなかったかなあ

……」

「あまり、間近で見たことのある鳥ではないですね」

「ねえ海末ちゃん、ゆりかもめは漢字でどう書くの？ 百

台鷗？」

「穂乃果、よく知っていますね、その通りです」

「おおー！ そうなんだ！」

「な、なんだか禁断の香りがするね」

「何故このモノレールがゆりかもめ、と名付けられたかまではわかりませんが」

「あ、それはね、東京都の鳥がゆりかもめだからなんだって」

「おお、ことりちゃん博識！」

「えへへ、本当は、ちよどこさつき調べてたから、なんだけどね」

「え、ゆりかもめを？」

「うん。ゆりかもめの時刻表を探すついでに、なんとなく」

「じゃあ、なんでゆりかもめが東京都の鳥なの？」

「それは、伊勢物語の一節ですね。その中に出てくる都鳥、という単語に由来しているそうです」

「えええ、なんで二人ともそんなにゆりかもめに詳しいのー！」

「あはは……たまたまだよ、たまたま。あ、穂乃果ちゃん、ほら、フジテレビが」

「あー、ほんとだ、大きい！」

「もう、穂乃果の声の方が大きいですよ」

「あ、ごめんさい、つい」

「穂乃果ちゃん、見るの初めてじゃないよね？」

「うん。そうなんだけど、なんていうか、憧れちゃうなって」

「憧れる？」

「今もきくと、あの建物のどこかで、アイドルさんが歌を